中国古典選 30

三体詩 二

監修 吉川幸次郎

村上哲見

朝日新聞社

中国古典選 30　三 体 詩 (二)

昭和53年 9 月 5 日　第 1 刷印刷
昭和53年 9 月20日　第 1 刷発行

定価380円

著　　者　村上哲見

発 行 者　朝日新聞社　藤 田 雄 三
発 行 所　朝日新聞社　東京　大阪　名古屋　北九州
印刷製本　内外印刷株式会社　凸版印刷株式会社

0198-260130-0042 ©TETSUMI MURAKAMI 1978

三　体　詩

（二）

村上哲見

監修 吉川幸次郎

吉川幸次郎

表紙・扉　伊藤鐵治

目次

七言律詩

四　実　二

同じく仙遊観に題す……韓　翃　三

楽天が早春寄せ見るるに和す……元　稹　一六

趙相公が〝鶴雀楼に登る〟に和す……殷堯藩　一九

凌歊台……許　渾　二一

洛陽城……許　渾　二四

金　陵……許　渾　二六

咸陽城の東楼……許　渾　二九

晩に東郭自り、一二の遊侶を留む……許　渾　三三

飛泉観の宿竜池に題す……許　渾　三四

咸陽懐古……劉滄（許渾）　三五

黄陵廟……李群玉（許渾）　三八

晩に湘源県に歇う……張　泌　四〇

廃　宅……呉　融　四二

竜泉寺の絶頂……方　干　四四

賈至が〝早に大明宮に朝す〟に和す……王　維　四六

又……岑　参　四九

暢当が嵩山に麻道士を尋ね て寄せ見るるに酬ゆ……盧　綸　五一

呉中に厳士元に別る…劉長卿（盧綸）　五四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

王・李二少府の潭・峽に貶せらるるを送る……高適（盧綸）　五六
西塞山……劉禹錫　五八
早春五門西望……王建　六〇
錦瑟……李商隱　六三
江亭の春霽……李郢　六六
人の嶺南に之くを送る……李郢　六九
九日　仙台に登り、劉明府に呈す……崔曙　七一
叢台……李遠　七四
寒食……来鵬　七五

四　虚

隋宮……李商隱　七九
馬嵬……李商隱　八二
籌筆駅……李商隱　八六
歌を聞く……李商隱　八八
茂陵……李商隱　九一
早秋京口の旅泊……李嘉祐　九四
晩に鄂州に次る……盧綸　九六
武陵に赴き、寒食に松滋渡に次る……竇常　九八
鄂州に厳澗が宅に寓す……元稹　一〇一
九日　斉山に登高す……杜牧　一〇三
王尊師に贈る……姚合　一〇六
王山人に贈る……許渾　一〇八
湘中に友人を送る……李頻　一一〇
元達上人　薬を種う……皮日休　一一三

前虚後実

黄鶴楼……崔顥　一一四
蘇台より望亭駅に至り、人家尽く空し……李嘉祐　一一五
僧と旧を話る……劉滄　一一九

長洲の懐古……劉　滄　一二四
煬帝の行宮……劉　滄　一二五
故丁補闕が郊居を経……許　渾　一二八
蕭兵曹に贈る……李嘉祐　一三〇
張芬が赦後に寄せらるるに
　酬ゆ……司空曙　一三三
竇拾遺が病に臥して寄せら
　るるに答う……包　佶　一三五
楽天に寄す……元　稹　一三七
秋居の病中……雍　陶　一四〇
崔約が下第して揚州に帰る
　を送る……姚　合　一四一
旅館に懐いを書す……劉　滄　一四三
潁州の客舎……姚　揆　一四五
春日　長安の即事……崔　魯　一四六
江　際……鄭　谷　一四八
中　年……鄭　谷　一五一
秋日東郊の作……皇甫冉　一五三
乗如禅師・蕭居士が嵩丘の
　蘭若に過る……王　維　一五五
友人の江南に遊ぶを送る……耿　湋　一五七
友人に送別す……姚　合　一六〇
嶺南の道中……李徳裕　一六三
病より起つ……来　鵬　一六四
李録事が饒州に赴くを送る…皇甫冉　一六五
清明の日、友人と玉塘荘に
　遊ぶ……来　鵬　一六八
淮浦に宿りて、司空曙に寄
　す……李　端　一七一
郭道士を尋ぬるに遇わず……白居易　一七三
早秋　天竺・霊隠寺に寄せ
　題す……賈　島　一七五

宣州開元寺の水閣に題す……杜　牧　一七七
長安の秋夕……趙　嘏　一七九
山寺に宿る……項　斯　一八一
永城駅に題す……薛　能　一八三
慈恩の偶題……鄭　谷　一八五
都城の蕭員外　海棠花を寄す……羊士諤　一八七
陳琳の墓……温庭筠　一九一
鸚鵡洲の眺望……崔　塗　一九三
繡嶺宮……崔　塗　一九五
前実後虚　春山の道中にして、孟侍御に寄す……張南史　一九八
早春　盩厔に帰って、耿湋・李端に寄す……盧　綸　一九九
松滋渡より峡中を望む……劉禹錫　二〇一
春日の閑坐……劉禹錫　二〇三
晏安寺……李　紳　二〇六
館娃宮……皮日休　二〇八
方干が隠居……李山甫　二〇
李端が病中に寄せらるるに酬ゆ……盧　綸　二一三
道士に贈る……褚　載　二一四
客の湖南に之くを送る……白居易　二一六
劉谷を送る……李郢（白居易）　二一九
江上に王将軍に逢う……李郢（白居易）　二二一
皮日休が茅山の広文に酬ゆるに和す……陸亀蒙　二二三
蒲津の河亭……唐彦謙　二二六
感懐……劉長卿　二二八
輞川の積雨……王　維　二三〇
石門の春暮……銭　起　二三三
　　二三五

慈恩の文郁上人に酬ゆ……賈　島　二三八
江亭の秋霽……李　郢　二四〇
漢南の春望……薛　能　二四三
春夕の旅懐……崔　塗　二四四
長　陵……唐彦謙　二四六
咸　陽……韋　莊　二四九
結　句　二五二
九原の飲馬泉に過る……李　益　二五三
西陵に到らんと欲して王行
　周に寄す……李　紳　二五五
竹を洗ぐ……王貞白　二五七
花を惜しむ……韓　偓　二五九
詠　物　二六一
崔少府が池鷺……雍　陶　二六三
鷓　鴣……鄭　谷　二六四
緋　桃……唐彦謙　二六七
牡　丹……羅　鄴　二六八
又……羅　隠　二七〇
梅　花……羅　隠　二七三

三体詩

（二）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

七言律詩

四実

周弼曰。其説在五言。但造句差長。微有分別。七字當爲一串。不可以五言泛加兩字。最難飽滿。易疎弱。而前後多不相應。自唐大中。工此者亦有數焉。可見其難矣。

周弼曰く、其の説は五言に在り。但し句を造ること差長く、微しく分別有り。七字は当に一串を為すべし。五言を以て泛りに両字を加う可からず。最も飽満し難く、疎弱なり易し。而うして前後多く相応ぜず。唐の大中より、此に工みなる者亦た数有り。其の難きを見る可し。

四実に関する説は五言律詩のところにみえる。ただし七言は五言にくらべて句作りが長いだけに、すこしくちがうところがある。一句の七字はかならずひとつながりになっていなければならず、五言の句にいいかげんに二字を加えたものであってはならない。すみずみまで充実するのはたいへん難かしく、とかくすきまができて弱々しくなりがちである。また前後の聯が対応せず、ばらばらになってしまうものが多い。唐の大中年間以後は、これを善くする者は数えるほどしかいない。この点からもその難かしさがわかる。

【補説】　律詩は八句より成るが、二句ずつ一組になっていて、これを聯という。八句はすなわち四聯である。そして第一聯から順に首聯、頷聯（前聯）、頸聯（後聯）、尾聯と名づけられている。第二、第三の聯、すなわち頷聯と頸聯（または前聯と後聯）とは、構成の上からも首、尾に対していわば胴体を成す部分であるが、更にこの二つの聯は必ず対句でなければならぬという重要な約束があり、この二つの対句のできばえ如何が、ほとんどその詩のできばえを左右する（この対句の部分を更に数多く積重ねて行くのがいわゆる「排律」または「長律」であり、最も高度の技術を要するスタイルである）。絶句においては、第三句（転句）の虚実によって、実接、虚接という類がたてられていたが、律詩においては、まずこの頷聯、頸聯の虚実による分類がなされている。

四実とは、五言律詩のところで「中の四句の皆な景物にして実なるを謂う」とあるように、頷聯、頸聯の四句のすべて、いいかえると二つの対句がともに実、すなわち具象的な事物の描写（多くは叙景）であるものをいう。「其説は五言に在り」とは、五言のところに右のような説明があるのでくり返さないということ。本書一・巻首の解説に述べたようにこの書は元来五言律詩が第一巻であったので、五言のところで述べられて、ここでは略されているのである。ところで、「四実」の意義は五言におけると同様であるが、七言と五言ではおのずからいろいろな差異を生ずるのは当然であろう。形の上からいえば、七言の句は五言の句の上に二字を加えたものだが、詩として五言と七言とはそれぞれ独自の境地があり、必然性をもって五言となり、七言となるのである。従って五言の句の上に二字をつけ足したような七言句ではいけないという。「飽満」はいっぱいに満ちたりる、充実する。同じ七律でも後の前実後虚のところには「句既に長く飽満な

り易し」とあるから、「最も飽満し難く」以下は五言と比べてというのではなく、七律の中で四実の体は、ということになるだろう。「前後多く相応ぜず」とは四句みな実事を述べるということになれば、緊密さが失われやすく、二つの対句が前後ばらばらになりがちだというのである。大中は宣宗の年号、八四七年より八六〇年。いわゆる「晩唐」の前半に属する。この時期以後、四実の七律を善くするものは少ないという。実際に採録されているのも盛唐（王維、岑参）、中唐（元稹、許渾、盧綸、劉禹錫、王建）の人が多く、その他晩唐の詩人でも、殷堯藩、李商隠は大中年間に卒した人である。五言の方でも開元、大暦すなわち盛唐より中唐のはじめに四実の体が多いとしている。また、そこでは四実の体は「雍容寛厚の態有り」と述べられているが、それはたしかに晩唐の詩に欠けている面であろう。この点からも、三体詩における詩のスタイルの分類が、いわゆる詩の風格というものと密接な関連をもっていることがわかる。

同題仙遊観　　韓翃

仙臺初見五城樓
風物凄凄宿雨收
山色遙連秦樹晚
砧聲近報漢宮秋
疎松影落空壇淨
細草春香小洞幽

同じく仙遊観に題す

仙台　初めて見る　五城楼
風物　凄凄として　宿雨　収まる
山色　遙かに連なる　秦樹の晩
砧声　近く報ず　漢宮の秋
疎松　影落ちて　空壇浄く
細草　春香ぐわしくして　小洞幽かなり

何用別尋方外去　　何ぞ用いん　別に方外を尋ねて去るを
人間亦自有丹丘　　人間　亦た自ら　丹丘　有り

「仙遊観」の「観」は道観、道教の寺院。「仙遊観」の所在はわからぬが、詩に「秦樹の晩」とあるから長安に在ったと思われる。「同題」とあるのは同行の人があって同時におのおの詠じたのであろう。

伝え聞く仙山の五城十二楼なるもの、ここ仙遊観を訪ねて初めて眼のあたりに見た
あたりの風物はさむざむと秋の気はいに満ち、ゆうべからの雨もあがった
山の色は遙かに、暮れゆく秦の地方の林に連なり
砧の響きはまぢかに、漢の宮殿にも秋の訪れたことを伝える
まばらな松の枝が影を落とし、祭壇はひっそりとして塵一つなく
細やかに茂る草は春のごとく香ぐわしく、小さなほこらはしずかに奥深い
ことさらに別世界に尋ね求めゆくことがあろうか
人境の中にもおのずから仙山はあるのだ

「五城楼」は西方の仙山、崑崙にあるという「五城十二楼」をいう。天隠注に「十洲記に曰く、崑崙山に五城十二楼有り」。そのほか「漢書・郊祀志」に「方士　言える有り、黄帝の時、五城十二楼を為る」、注に「応劭曰く、昆侖玄圃の五城十二楼は、仙人の常に居る所なり」。なお「玄圃」は県圃とも書く、崑崙山の頂上をいう。「楚辞・天問」にも「崑崙の県圃、其の居　安くにか在る。増城九重、其の高さ幾里ぞ」、王逸の注に「崑崙は山名なり。西北に在り。元気の出ずる

所。其の巔を県圃と曰う。乃ち上　天に通ずるなり……増は重なり。五城十二楼有り、括地象に見ゆ」。ここは仙遊観の建物を、崑崙の五城十二楼にみたてたのである。第二句、「風物凄凄」は、「詩経・鄭風」の「風雨」に、「風雨凄凄たり」とあり、孔穎達の疏に、「凄凄」を「寒涼の意」とする。また「小雅」の「四月」にも「秋日凄凄たり」とある。「宿雨」は前日より降りつづく雨をいう。「収」は、天体気象などについて、うすれゆく、消え去ることをいう（「日収」、「雲収」など）。ここは雨のあがること。李渉「開聖寺に題す」詩に「宿雨初めて収まって　草木濃し」（本書一・一三四ページ）。第三句、「秦樹」の「秦」は長安の附近をいう。いまの陝西省の南部、いにしえの秦の故地である。第四句の「砧声」は砧をうつ音。砧とは織りあげた布をやわらげ、かつつやを出すためにたたくこと、またその台をいう。冬支度を急ぐ砧のひびきは、秋の夜の静けさを強調するよすがとして、しばしば詩にみえる（「長安　一片の月、万戸　衣を擣つ声」、李白「子夜呉歌」、「唐詩選」など）。ここも「近く報ず」の「近」は、実際に近くからというよりは、秋の夜の静けさのゆえにまるですぐ近くのようにきこえるということであろう。「漢宮」とは、長安は漢の都でもあったから、長安の宮殿を漢宮といったのである。

第六句の「春香」は秋であるのに春のごとくかおるというので、ここが常ならぬ別世界であることを強調するのであろう。ただし「香生」「香り生じて」となっている本があり、その方が前の句の「影落ちて」とよく対するという。「俗本〝春香〟に作るは非なり。〝影落・香生〟は自ら是れ的対なり」（明・焦竑「焦氏筆乗」）。第七句、「何ぞ用いん」は反語。どうして必要だろうか、その必要はない。「方外」は、この世の外、常の世ならざる別世界をいう。次の句の「人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com